

刊我 我自

嘉永明治年間錄

卷十七下

			五	和
			二	書
			七	門
			二	類
二	五			
〇	二	二		
冊	架	函	號	

庫	文	閣	內	
一			五	和
五			二	書
〇			七	
二			二	
四			〇	
架			冊	
			號	
			類	

內閣文庫	
番號	和 5272
冊數	20 (20)
函號	150 169



嘉永明治年間録卷之十七

吉野眞保編輯

慶應四年 戊辰

五月

朔日 薩藩池上四郎左衛門歸府白川城戰爭ノ狀ヲ白ス

賊徒等白川城ヲ據リ益禍心を逞シムル付去閏四月廿八日漸く奥州白坂驛迄着シ

廿九日白川城攻撃の筈ニ座ル處延引にて本月朔日未明より三方へ手配致シ五

番隊迄黒川村より原街道へ練出シル處賊兵臺場等築立致防禦ニ付直様進撃諸

所臺場等追崩シ白川町口迄攻入長州大垣三藩にて賊兵を中ニ取込頻リニ攻立ル

處賊兵大ニ狼狽致シ付過分打取申ル未だ首級等も相分不申ルへ共大概五六百

位ハ可有之奉存ル何分此度の儀ハ十分の好都合にて少も遺策無之誠ニ愉快の事

ニ座ル由委細の儀ハ本營方より座届可申上ル弊藩戦死手負左之通

即死七人手負三十八人 姓名畧之此外夫卒畧す

二日 勅シテ諸藩戦士ノ勞ヲ慰ム

一 東山道先鋒薩州長州因州彦根土州大垣 徳川慶喜及降伏ル處殘賊猶過心を逞

し所々屯集官軍お抗し折柄野州小山宇都宮其外數ヶ所お於て捐軀激勵屢遂  
苦戰及進撃の段 叙感不斜の猶此上一際抽精忠鞠躬盡力速に平定の功を奏し  
可奉安 宸襟被仰出ひ此段戰士へ可相達旨御沙汰の事

一東海道先鋒薩州長州大村 德川慶喜及降伏の處殘賊猶禍心を逞し要地お據り  
官軍お相抗し折柄總州八幡五井姉ヶ崎邊お於て遂勇戦の段達 叙聞御満足  
お被思召の猶此上一際抽精忠鞠躬盡力速に賊徒平定の功を奏し可被奉安 宸  
襟被仰出ひ此段戰士へ可相達旨御沙汰の事

一同備前伊州佐土原 德川慶喜及降伏の處殘賊猶野心を逞し要地お據り官軍お  
相抗し折柄總州市川船橋八幡五井姉ヶ崎邊お於て以下前同文  
一中軍筑前 德川慶喜及降伏の處殘賊猶野心を逞し要地お據り官軍お相抗し  
折柄總州船橋邊お於て以下前同文

一海軍薩州 德川慶喜及降伏の處殘賊猶野心を逞し要地お據り官軍お相抗し  
折柄總州姉ヶ崎邊お於て以下前同文  
一東山道前橋高崎吉井佐野 德川慶喜及降伏の處殘賊猶野心を逞し所々屯集官  
軍お相抗し折柄野州三國峠お於て以下前同文

一同館林笠間壬生須坂 德川慶喜及降伏の處殘賊猶野心を逞し所々屯集官軍  
相抗し折柄野州小山總州結城邊お於て以下前同文  
右御書付の穂波三位殿 勅使として東海道兩道總督府御本陣へ被行向渡り相  
成の事

願ニ依テ松平確堂ニ德川家後見ヲ命ス  
松平確堂當分の内德川龜之助後見の儀願之通被仰出の事  
三日 德川家旗下歸順輩ヲ朝臣ト爲ス

德川龜之助重臣呼出御達の寫 旗下歸順の輩自今朝臣お被仰付の間此段相達  
の事

下總下野兩國鎮撫ヲ肥前侍從ニ命ス

一肥前侍從 下ノ總野州近邊賊徒出沒官軍お抗し 王土を掠め 王民を苦め未  
だ平定お不至の間下ノ總野州鎮撫の爲め出張致し賊徒鎮壓猶二州藩々の向背  
篤と相察し民政筋取締人心安堵の様指揮可有之旨大總督官御沙汰の事  
輪王寺宮ニ登城ヲ命ス

從 朝廷御沙汰の儀有之の間明四日巳の刻御登城在せられの様大總督官御沙汰

天明二年閏五月廿七日 戊辰

の事

六日 上野國鎮撫ヲ麻橋少將ニ命ス

一前橋少將 賊徒猶野心を逞し 王土を掠め 王民を苦しめ所々出沒官軍ヲ相  
抗し未だ平定お不至お付上野全國鎮撫被仰付お間民政の儀ハ勿論藩々の向  
背をも篤と相察し取締行届お様盡力可有之旨大總督官係沙汰お事

大總督府 參謀

總野等五國監察使ヲ島團右衛門等ニ命ス

一島團右衛門 軍監被仰付下總野二州爲監察被差遣お事

一和田藤之助 軍監被仰付駿州沼津爲監察被差遣お事

一中井範五郎三雲爲一郎 軍監被仰付豆相二州爲監察被差遣お條申合盡力可有  
之の事

監察使ヲ關東ニ下スニ就テ大久保加賀守等ニ達スルノ書

一大久保加賀守江川太郎左衛門 先般殘賊林昌之助以下脫走の者其領内罷通お  
節不都台の儀も有之お趣相聞え如何の事お依之屹度係沙汰にも可及の處於此  
度ハ其分お被差置今般軍監中井範五郎三雲爲一郎豆相兩州爲監察被差越お條

諸事不行届無之様精々盡力可有之旨係沙汰お事

野州今市宿戰爭ノ旨土州藩ヨリ届書

會藩並江戸脫走の兵去月廿九日頃より大桑小百高畑高百邊へ繰出し今市の北毘  
沙門山お旗を建夜分ハ所々お箒を焚追々當驛お相追お付嚴お備て相待居お處  
當月六日賊終お毘沙門山榮舊山等お兵を出し從芹沼大谷川を渡り朝五ツ時頃東  
の方杉林の中より發砲追々宇都宮壬生兩街道より來お付不取敢三小隊を以て當  
り遊軍二小隊兩道お出助の砲隊亦左の方よりこれお應ト且山上の賊より發砲お  
お付大砲三四發打懸お處忽散亂仕お然るお兩道の戰勝敗未決此日別お弊藩人數  
從宇都宮二小隊計當驛到着の筈お付夾擊可仕と存相待おへ共存外ハ遅刻お付人  
數三十人計間道より賊の背ハ出不意お襲夾擊仕お處遂お敗走折柄宮城より人數  
參會賊兵八方へ散亂仕お付諸隊一里計追擊仕七ツ時頃今市へ引取申お

土州 板垣 退助

覺

橋本順助官地元兵衛谷本忠一郎右討死小野早太高橋喜佐治上田庄藏三木壯之助  
小松克馬田邊豪次郎佐藤順吉小松駒之助西楠太郎猪石榮太郎宮地小十郎森岡團

戊辰 三

右衛門江口龜三郎中島榮太郎右手負馬取京次死亡 右の今五月六日戦争の砌り討死手負如斯座以上 土州 板垣 退助

覺

仕付彈藥三千六十計○小銃三十五挺○大砲一門○タヌ十七○刀九本○脇差十二本○金百兩三朱○白米一カマス○フランクット四枚○馬一疋○木砲一挺○生捕賊徒一人○討取同廿七人

但此外賊方へ引取手負死人不相分且麥畑林間溝中お籠居ひ者も可有之ひへ共夫々取調べ相調ひ不申ひ付追て取調の上係達仕ひ 右の今月六日野州今市驛お於て戦争の節諸隊へ討取分捕等右之通お座以上

辰五月

土州 板垣 退助

虜人加藤林三郎野州今市宿戦争ノ状ヲ白ス

第一大隊長會今見太郎 秋月登之助事宇城より引取り白川口お出る○軍奉行江戸大島某會織神某○大隊長加藤平内○總督會田中藏人江戸大鳥敬助 高德二七聯隊出張隊長へ原平太夫○錠藤原邊第三隊屯すと云○大隊司令へ羽織お銀の筋四ツ有之と云○軍監會磯貝某○砲隊差圖役會布瀬七郎○第二隊長沼新次郎

今四月廿一日於今市被討取ひ内小隊長杉口精一郎右嚮導平山彌三郎

五月六日於同所被討取ひ小隊長中根量藏半隊長會岸武之助 右之通

五月六日於今市生捕ひ右嚮導加藤林三郎白狀の畧

専ら今市を攻んとするへ今市お據り諸道へ向はんが爲なり○六日東の方へ向ひし兵へ會兵並ひ江戸浪人等なり○先達て日光より會藩へ引取り新お軍議を定め再び出張と云○兵糧彈藥へ絶お會の本國より送ると云○會の國老山川大内藏江戸兵の不振を憤り會侯の内命を請け出張すると云

七日 上野北大門町ニ於テ肥前藩士彰義隊ノ爲ニ害セララル

昨七日弊藩先鋒野州練込兵隊の内士分二人痛所有之行軍は相後れ暮六ツ時頃上野北大門町を駕籠よて通行いたし處何者お哉八九人計り仕掛參り無体し切掛ひお付不得止及抜合ひ得共何分人少みて力不及壹人へ殺害お逢ひ壹人へ深手負同夜五ツ時半頃弊邸へ罷歸り右之段先鋒宿陣所へ申通ひ處一隊甚憤怒を生ト堪兼居ひし付相手方のもの係召捕被下ひ哉無左ひへ此方一手を以て及返戦ひ勢お付先以て此段不取政係届仕ひ以上

五月八日

肥前侍從内 吉村 謙吉

掛紙 相手方始末の儀ハ隊中耻辱ハ不成様ハ處置被爲在ハ聞其藩先鋒の儀ハ早  
早可有行進事

薩州斥候彰義隊ノ爲ニ書セララル

兵士有吉庄之丞湯池治右衛門有馬早八郎 右者斥候の者共ハて座ハ處昨七日  
夕時分根岸邊ハ於テ彰義隊の者八九人ハ行逢ハ處右三人を取卷キ是非屯所ヘ可  
連越段申聞ハ共相斷ハ處直様切掛暫時相戦ハ由一人ハ其場ハ切伏敵兩人打  
果六人ハ手を負セタル由座ハ共猶追々多人數馳集ハ付無據兩人切拔ケ駒  
込千駄木町觀音堂前まで引取ハ由ハ共皆深手を負ハ上段々追重ハ付不得  
止一人ハ切腹いたシ一人の者も割腹可致處を早鉄砲を以テ被打伏ハ段探索者の  
者届出ハ付追テ確證を得委細可申上ハ共不取敢申上置ハ以上

一橋茂榮前將軍ヲシテ城地ニ復封セシメンテヲ歎願スルノ書

乍恐顛沛流離の孤臣茂榮稽首百拜奉哀訴 大營下ハ伏而惟るに今般弊宗慶喜爲  
御征討六師遙に東向相成上下學テ奉恐懼ハ慶喜恭順謹慎奉對 朝廷毫も無二  
念の實効ハ明鑒被成下最前ハ沙汰の通出格寛大の思召を以テ田安龜之助ヘ家名

相續被仰出祖先血脈斷切に至不申至幸至福在水戸表慶喜の踊躍感恩ハ不及申私  
共始め臣庶一統暗夜ハ燈火を得ハ如ク寔以テ至仁のハ處分感泣罔極の次第奉存  
ハ猶又城地封土の儀も追テ沙汰可被爲在旨ハ下知是又難有仕合奉得其意ハ右  
様厚く御仁惠被爲盡ハ折柄不顧忌諱再三奉續陳ハ深く奉恐入ハ共私共始め  
役人共邊ハ至ハ迄實ハ差向不可奈何の深憂ハ座ハ所以ハ改テ申上ハ迄ハ無座  
ハ共衣食住の三件ハ人民生活の緊要ハて天縱の聖賢ハ格別中人以下ハ至ハて  
ハ右三件足ハ時ハ兇惡化シテ良善と成リ事欠ハハ變トテ兇惡と相成ハ是人情  
の自然和漢古今の通義ハ座ハ在昔聖主明君の治務専ら此三ハ心を被爲盡孔子  
も庶富の二字を以テ教字の上ハ之を置き孟軻王道を論トハハ養生喪死無感を  
第一の口實と仕リ管仲の如キハ至ハて衣食足テ後知禮節の語相見え既ハ萬々  
恐多くも此程 皇政御維新の御大號令ハも首として此義も被爲掲ハハ實ハ千載  
の御美事と天下億兆不奉感稱者も無之難有儀奉存ハ方今在江戸數十方の士庶  
大早望霓の如ク日夜翹足して城地封土のハ沙汰奉待ハハ畢竟前條三件ハ關係仕  
ハよりの儀ハ申上ハ迄ハ無之抑城地ハ返與相成ハハ士庶人由テ以テ其居の寧  
ハらん事を知リ封土ハ一定被成下ハハ由テ以テ衣食の給ハハを辨ヘ人々安堵

令せぎして邑内静謐も趣きひり日を期して相待可申若し又彼是係査檢等の御都合も被爲在或は此上の所沙汰は緩期も至り節々恐至公至平の御廟算奉拜察の輩の誓て不理の心念等相抱さひ者一箇も無座儀ありへ共士庶未々短識淺慮の者共お至ひては飢渴身お逼り手足所措無之終は溝瀆は駢死可仕事と眼前の形勢は錯愕顛倒仕り不覺天然の良心取失ひ強者の其力を恃ひて粗暴の舉動も及び弱者の甘トて狗盜鼠竊の所業を營み放僻邪侈至らざる所なく其身の刑戮お陥みをも相忘ひ様成行可申若し然れば自業自得と申上り王政御復古の御美事にも相悖り次に慶喜恭順の實行も是等の爲は水泡と相成りては臣子の情何共心外千万の儀若し又紛擾一邑一國お止り不申潰亂四出駸々然外疆も及し終は皇國御一体の動静お相懸り毎々議者の相憂は外夷覬覦の聲端も相啓けり様にて苟も王化の下は覆育仕ひ者何と申上りて宜は哉憂念爰も及びへは食不下喉眼不合睚九勝寸斷痛苦砭髓とも可申儀何卒厚き御仁惠の上にも猶一層の御仁惠被爲施城地係返與封土は一定被成下數万の士庶衣食住の艱難無之不良の輩自然削跡仕ひ様の所沙汰片時も速は被仰出ひ様叩頭流血哀號奉歎願ひ且又近日の街説は城地の儀は他國他邑へ移轉可被仰付杯と喋々申觸ひ者有之人心大は動搖仕ひ

哉お承及申ひ右は無根の妄説固より信用仕ひお足り不申ひへ共所謂胡馬嘶北風の人情銘々三百年來祖先墳墓の地を立離ひ様成行ひては其沸騰中々以て前條の比に無之如何計の儀は可有之りと想像の憂苦筆紙は述盡し兼は次第は座は仰ぎ願くは右邊の所沙汰は万々不被爲在ひ儀と奉存ひへ共何卒江戸城の儀は其儘係引渡被成下ひ様仕度前以て幾重にも奉伏願ひ先般役人共一同より奉歎願ひ慶喜江戸表へ還住の儀は又人心の向背に尤も關係仕ひ儀にて詩經にも其新乳嘉其舊如何之と相見えは通屬下の士庶既に御仁惠に依り新主を奉ざるの時を得猶此上城地封土等安心の場合に立至ひ共一旦委質沽恩の舊主現在僻遠に幽居罷在其樂を共に仕ひ儀出來兼ひ時は一心兩向中賜如燬畢竟安堵の名有て安堵の實少く就ては私共始め痛心の廉も不少は間同人儀既に伏罪の上寛大の御沙汰を奉蒙ひ程の儀故今一重の御仁慮と以て同人還住の所沙汰城地封土一舉に被仰出ひへは士庶の宿望頓に相滿天恩至大永く心肝に徹銘仕り聊忘却の期有座間敷奉存ひ元來茂榮儀慶喜支族に相連ひへは共々謹慎中の身分陋劣を不顧敢て譬言を以て奉冒大營ひは其罪不少はへ共今や宗家の危急に當り且皇國御一体動静の端緒にも關係仕ひ儀と過慮仕ひへは何分傍觀坐視仕ひに不忍前條の件々

衆情に基き伏て奉歎願ひ儀に座出格の海量を以て葑菲の採擇も被下置  
ひへ有難き仕合奉存ひ誠恐誠惶頓首謹上

慶應四戊辰五月

一橋 茂榮

酒井雅樂酒井忠績歎願書

不顧有罪之身在恐言上仕抑今度の御大變に立至ひ儀に畢竟私共不行届の事に  
て何共可申上様も無座深く恐入罷在ひ就てり 朝廷御裁許の儀に付父閑亭よ  
り別紙之通 朝廷へ哀訴仕の間兼て聞置被成下度奉存ひ城の儀に家へ返上  
可仕答ひへ共既に先般申上置ひ通り開城被仰付今に外藩の者本城相固居ひ次第  
に付無據別紙之趣嘆願仕の間此段申上ひ以上 酒井 雅樂  
謹而奉哀訴ひ今般主人慶喜恭順謹慎無二念の段達 叡聞且祖先以來治世の遺勳  
を被思召家名相續被仰出誠に難有 叡慮の程奉感佩ひ同氏忠悃儀主家輔翼の道  
行届不申ひより遂に徳川累代 朝廷恭敬の意も貫徹不仕次第に相運ひ實に悲歎  
惶慎の至に奉存ひ依之嚴敷謹慎爲仕奉待座嚴罰ひ忌諱に觸ひ儀にて奉恐入ひへ  
とも廣く言語を被爲聞ひに付奉申上度私家筋の儀に元來徳川家臣僕にて主家奉  
蒙御委任ひより隨て過分の爵秩を辱くし儀に付 天恩の莫大なる世々子孫

不奉恐ひへ共徳川家衰運の今日お至り累世の恩義を不顧主家と並列比肩の様お  
ての君父を輕蔑するの筋お相當り座責をも可奉蒙假令寛宥の 聖慮を以て御  
咎免れひ共又臣子の上にて誠お難忍事座座殊お封建の制度お座座上  
の各藩陪臣の分も是までの通お可有之奉存ひお付私共家筋にて徳川家お隨從  
仕り奉報 御國恩度志願座座又領地の儀に忠悃奉蒙 天譴且此度座座變革の  
折柄お付被召上ひ儀に當然の座事にて聊遺憾無座座間何卒前件申上ひ下愚の  
至願座座憐察の上座聞濟被成下ひ様奉願ひ此上奉恐入ひへ共儻格別の 皇怒を以  
て是までの所領の士民共飢渴を免れひへ難有仕合奉存ひ抑 王政御一新世道  
御匡濟の時座膺り假初にも君臣の名義を忘却し私利を營みひ様にて座則奉欺  
天朝儀にて上座失體を醸し下座賊臣覬覦を生座可申哉と深く痛心憂慮の餘奉  
犯 天怒の罪不顧万死只管奉願ひ誠惶頓首 酒井 忠績  
十四日 徳川家臣脱走ノ徒誅罰ノ旨ヲ市中ニ布告ス  
過日以来脱走の輩上野山内其外所々屯集屢官兵を暗殺し或は官軍と偽り民財を  
掠奪し益兇暴を逞するの條實は國家の亂賊たり以來右様者へ見付次第速お可打  
取若し万一密お扶助致し或は隠し置ひ者於有之座賊徒同罪たるべき者也



今般徳川慶喜恭順の實効を表するより祖宗の功勞を被思食家各相續被仰出城地祿高等の儀も追々沙汰相成り末々の者に至る迄各其所を得ざる者無之様被遊度との思食被爲在の處豈圖んや籐本末々心得違の輩至仁の御趣意を拜戴し奉ざるのみならず主人慶喜の素志戻り謹慎中の身を以て恣み脱走し及び所屯集官軍の相抗し無辜の民財を掠奪し兇暴至らざる所なく萬民塗炭の苦み陥んとす故に今般不得已之を誅伐せしむ素より其害を除き天下を泰山の安き置き億兆の民をして早く安堵の思をなさしめん爲なれば猥み離散することあるべからざる篤と御趣意を體認し奉り末々の者に至る迄聊心得違無之屹度安堵致し各其生業を營み其分安きべき者也

上野屯集ノ徒追討ノ旨ヲ徳川龜之助及ヒ江戸近國ノ諸藩ニ達ス

一徳川龜之助へ 過日以來籐本末々心得違の者 朝廷寛仁の御趣意を不奉拜戴主人慶喜恭順の意の背き謹慎中の身を以て脱走し及び上野山内其外所々屯集官兵を暗殺し民財掠奪益兇暴を逞し以て官軍の抗衡す實に不可赦の國賊也故に不被爲得止明十五日誅伐被仰出此段爲心得可相違旨 大總督官御沙汰の事

一徳川龜之助 上野山内は有之祖先の靈位重器等今日中取片付の様 大總督官御沙汰の事

一松平下總守 過日以來以下同文誅伐被仰出依之軍監並み藝州兵隊被差遣の間萬事中合せ領内取締向の勿論嚴重軍備を整へ賊徒落行の者有之節は速に可打取萬一不都合の儀於有之屹度御沙汰も可被及び間精々不行届無之様盡力可有之旨 大總督官御沙汰の事

一松平周防守 過日以來以下同文誅伐被仰出依之軍監並み筑前兵隊被差遣の間以下前同文

近國の藩々へ御達の寫

過日以來以下前同文誅伐被仰出依之領内取締向の勿論以下前同文

上野屯集ノ徒追討ニ就キ輪王寺宮該地ヲ退クヘキノ達

今度徳川慶喜恭順の實効相立家各相續の儀被仰出依付籐下の輩愈以て謹慎の可能在の處心得違の徒恣み脱走所々屯集し主人の意を戻りのみ成り屢官兵を暗殺し民財を掠奪し王化を妨所業實に不相濟次第に討伐可及の勿論の儀あり共今日迄遷延相成り畢竟官御方への御懿親の儀故於 朝廷厚

き思召も被爲在於總督官も深く係配慮被遊御使を以て係登城の儀仰入られ其後  
參謀をも被差遣ひ處迄面會も無之猶又再應覺王龍王兩院をも被爲召ひへ共更  
出頭不致此上ハ係救可被成ひ道も絶果一方ならせ係焦慮被遊ひ乍去何分 國家  
の亂賊其儘被爲差置ひてハ万民塗炭の苦み陥り 朝憲も更ハ不相立次第付誠  
み不被爲得止討伐被仰出ひ間官御方急速係立退み相成ひ様可申上旨 大總督官  
御沙汰み間此段申上ひ宜く執達可有之也

上野岡屯集ノ徒追討ヲ諸藩ニ命ス

簾下末々脱走の輩上野山内其外所々屯集屢官軍の兵士を暗殺し無辜の民財を掠  
奪し益暴虐を逞し官軍ハ抗衡す實ハ大罪不可赦の國賊也最早 朝廷寛仁の道も  
絶果斷然誅伐被仰出ひ付てハ勇闘激戰奮て國賊を鑿殺し億兆蒼生の塗炭を救ひ  
速ハ平定の功を奏し可奉安 宸襟旨御沙汰事

十五日 官軍彰義隊ヲ上野ニ攻撃ス

五月十四日夕方東叡山み屯集致し居ひ彰義隊より明十五日官軍襲來の風聞有之  
ひ間老人婦女子立退き様近邊町々へ太鼓を打ち觸廻りみ付人々騷立荷物等  
持運び大混雜翌十五日朝五時過官軍分隊めて諸方より押寄せ湯島天神山並ハ不

忍池を隔てたる柿原の邸へ大砲相備へ松源並雁鍋共ハ料理の樓上へハ大砲引上

け山下邊戦ひ相始りみと直み發砲山内彰義隊よりハ山王山より大小砲打降し遂

ハ大戦争と相成り双方より打出す破裂玉みて所々一時み燃上り山下の巷々み於

て小合戦有之始め彰義隊の方大ハ勝利の様子み相見えみ處八ツ時頃官軍の大兵

黒門前み寄來り山内貫義隊の一手裏切の由にて諸方戦ひ一際劇敷く時々會と相

記し旗押立ひて裏手より援兵來りみ様子の處右ハ偽兵にて忽ち發砲其内山門

中堂諸坊より煙焰盛み立昇り遂み山内山外の彰義隊皆崩立ちみて口々の官兵一

度み攻入山王山ハ働居み彰義隊を夾撃鑿殺いたし由七時頃み至り全く戦ひ終

る官家の御退去ハ其前日なり共云ハ又當日午前なり共云ハ係退先ハ發輝と不

相分敗兵ハ諸方へ分散一手ハ東橋へりりみ處固めの紀兵相支ひて戦争有之み

へ共遂ハ切拔落行み由○其後山下邊ハ官軍の邏兵夥敷く帶刀の者を見懸みへハ

有無の懸合なく切捨に致し根津谷中邊落武者の穿鑿尤も嚴重なり十六十七の兩

日ハ山内ハ貯へ有之米及び諸坊ハ勿論官様の手道具並ハ金銀御紋散との佛具

迄下人へ投與或ハ踏壞し且又近日山内み残る所の建具を焼拂ふとの風聞あり諸

説未定○本文彰義隊と云ハ徳川並み諸藩の脱走人等屯集したる者にして決て徳

川家の正兵よあらぎ其頭ハ小田井藏太池田大隅守菅沼三五郎春日鉄太郎と稱する者の由此騒動の當日徳川家執政より解兵の使として服部筑前守行向ひけれど遂に服せざりしとの風聞あり實に遺憾と云べし○台徳公廟前に於て滯紙を敷き其上にて切腹したる者六人あり既其首を取去れる故誰なるり知れず○會の援兵と稱して裏手より入たるハ全く訛説なりと云ふ裏切も亦詳ならず此度兵火焼失の場所ハ公私雜報第十五號ハ圖あり詳なり就て見べし○本文貫義隊ハ多分諸藩の脱走人にして彰義隊中の一分隊なり

昨十五日朝未明より太鼓の音所々ハ聞えて官軍繰出と相成り御門々々橋々皆ハ切となり出入を止めらる間もなく砲聲少々相聞え湯島通り出火あり此頃中の大雨にて十分おめり有之折柄なれば手過ちの出火ハあるべうらぎ何様只事ならざと思へども往來留なれば火元見の者を出す事も叶はざ只相あつまりて此頃中の風聞を語り合ひ空く出火の方角を詠め居たり○或ハ言ふ昨夜何國の兵とも知らざ千五百人程千住口より江戸へ入込たり夫故ハ戦争始まりたるならんと或ハ言ふ此程上野山内屯集の兵士錦の旗葵御紋の旗などを拵へ戦争の用意頻りなりと或ハ言ふ當時江戸御府内ハ在て義を結び相盟約するの諸隊游撃隊銃隊撤兵

隊ハ暫く言ハせ彰義隊純忠隊精忠隊盡義隊松石隊臥龍隊萬字隊水心隊其他諸國の脱走兵士所々ハ潜伏し事を計る者幾万人なるを知らざ其徒一時相響應するハ於てハ如何なる事變を生せんも計り難しと衆説紛々更ニ定論なし○其時一人の來客ありて曰く諸公の話皆信ざるハ足らざ昨日前文の如く上野屯兵御追討の儀彌以て諸藩の各隊ハ布告に成たる事既に明りに聞えしハ參政一翁殿筑前守殿を初め諸役人衆大に憂慮し靜寛院官様天璋院様の御直書を持ちて今曉未明に大總督府へ御猶豫の儀出願に相成りしが時すでにおくれて最早官軍上野ハ於て戦を開きし跡ハ成たりと是のみの實説なり後の成行ハ如何とも知らざと云ふ○かくて此日も大雨止まざ砲聲屢々轟き火勢益盛にして老弱婦女難を逃れて道路ハさまよう者哀みの聲街市ハ滿つ然れども皆狼狽して逃れ來れる者のみなれば今日の様子を問へども一人として憊み答ふる者なし○出火の場所ハ上野山下湯島天神の邊廣小路池の端仲町下谷邊凡五六ヶ所ハ火の手上りすさまじき事云ん方なし兩國橋をハ切落し大砲打懸くべき間立退きハ様の知せありて兩國近邊の者俄ハ諸方へ立退き混雜す柳橋ハ既ハ切落したりと云ふ○夕方ハ成て官軍追々歸陣し砲聲全く止み人々少しく安堵の思ひをなす○火事ハ益々はげしく上野山内

にも火の手起り中堂御本坊悉く焼失す宿坊も半焼失せし由○山内屯集の兵何方へ立退きしや御門主様にもいまだ落着き聞りき○今朝上野邊より來りし者の話を聞けり廣小路片側焼失仲町大抵焼失したる由山下雁鍋の邊より東側の小屋敷焼失し廣徳寺前少々類焼す○廣小路邊より山内は死骸六十余もあり其外火災み依て怪我せし者且双方の怪我人多く有るべし追て委しき報告を得て善載すべし○同日晝過大砲數發南方に聞えたり右の何方の船にや蒸氣船一艘品川へ入津せし也○昨日の戦ひ大雨にて双方共難戦なりしが官軍の方より追々新手を入替々々攻立けるふぞ屯集の兵の應援なく遂に敗走み及びける大砲小銃分捕頗る多し○團子坂の方類焼死亡最多し○昨日黄昏吾妻橋の上にて戦ひ有りしと見え橋上の鮮血おびたしく流れ鉄砲玉なども橋の邊に落散居たりと淺草邊の者來り話せり兩國藏前邊にては砲聲を聞けり様子に詳ならずと云ふ○今朝王子の方にて又一戦ありしよし彼方より來りし百姓が途中にて拾ひたりとて鉄砲の玉を持ち來りり黃銅にて製したる管にて至極精巧なる者なり是まで未だ見當らざる品にて勿論舶來の品なり定めて官軍の内精巧新式の銃を所持する者ありと見えたり

徳川家臣山岡鉄太郎兵火ヲ侵シテ上野東照宮ノ木主ヲ出ス

去る十五日上野山内兵火の節東照宮様御木像へ取出し奉る者も無りしゆ山岡鉄太郎これと歎き大總督府の免許を受け精銳隊の士數名を召連れ彈丸劍戟の中を侵して恙無く取出し奉り寺社奉行並酒井安房守の宅まで移し奉りし由官軍撃テ上野屯集ノ徒ヲ平定ス

上野山内屯集の賊追討として未明より各藩の兵隊大下馬に相揃ひ各隊操出す山兵忽ち敗走し上野山内悉く灰燼となり夕七時半時凱陣す此日討取處の賊徒山内所々累々として其數を不知死傷生捕共凡千人餘各藩攻口左之通

湯島より黒門前薩州肥後因州○本郷より長州肥前筑後大村佐土原○富山邸肥前筑後○駒込水戸邸備前伊州佐土原尾州礮礮隊○一橋御門より水道橋阿州○水道橋より水戸本邸邊尾州○聖堂近邊新發田○森川宿道分邊備前○大川橋紀州軍監兩人差添○千住大橋因州○川口大久保與市沼田肥後○戸田川備前○下總古河肥前○武藏忍藝州○川越筑前

輪王寺宮出奔ニ就キ尋テ求ムヘキノ達  
今度上野山内屯集の賊徒討伐の御輪王寺官御立退ふ相成り行衛更に不相分ゆ

付右御行衛相分りのハ、早々可申出旨御沙汰の事  
十七日 感状ヲ白川城追討ノ諸藩ニ賜フ

奥羽の賊徒猖獗白川城の要地ニ盤踞シ益兇暴を恣ニシ官軍ニ相抗シ折柄去る  
朔日奮戦を遂げ寡兵を以て忽賊徒を掃攘シ遂ニ城地を乗取り大ニ賊膽を破リ  
條深く感賞ハ尙成功の次第速ニ可遂 奏聞ハ此上彌抽忠誠鞠躬盡力可有之ハ依  
テ感状如件

慶應四年戊辰五月

大總督

薩州藩 長州藩 大垣藩 忍藩 隊長中

右各通

上野東照宮木主ヲ舊田安邸中ニ遷ス

此程御届申上置ハ東照宮木主上野事件の節精銳隊の者持運ビ小石川富坂住居罷  
在ハ寺社奉行並酒井安房守宅へ遷座致シ置キ日々精銳隊にて警衛爲仕置ハ處此  
度田安門内元田安屋敷内へ遷座仕リ尤も途中の儀ハ十二三人にて警固爲致ハ此  
段係届申上ハ以上  
徳川龜之助後見 松平 確 堂

野州真岡代官山内源七郎ヲ臯ス

真岡陣屋代官山内源七郎陽ハ恭順の姿を顯シハ付格段寛大の思召を以て舊ハ  
依テ代官勤被仰付置ハ處其懸りの手附にて先般大田原へ會津賊兵の嚮導等致シ  
ハ儀普ク衆人の所知其上官軍へ護送するの名儀にて會賊へ米穀等内分差送り不  
遠内黨類をも相集ハ由ハ付其儘に致シ置ハハ賊勢益可致増長ハ付今十七日  
四ツ半時左之通爲取計ハ儀ハ座ハ 真岡陣屋代官山内源七郎手附三澤昇四郎  
平田儀助松平裁右衛門江並善太郎 右ハ打果代官山内源七郎一人だけ獄門ハ相  
懸け陣屋等焼捨て所の名主等呼出シ得ト申諭シ人心安堵家業向可致出精ハ様申  
達タル儀ハ座ハ尤も出張人數左之通

土州三原兎彌太其外兵隊凡二十人○肥前重松善左衛門其外兵隊凡四十人

右爲可申上如斯ハ座ハ以上

肥前藩

十八日 感状ヲ上野岡追討ノ諸藩ニ賜フ

今般上野山内屯集の賊徒追討の節終日奮戦忽ち及掃撃ハ條深く感賞ハ尙戦功の  
次第速ニ可遂 奏聞ハ彌抽誠忠勉勵可有之仍感状如件

慶應四戊辰年五月

大總督

薩州 長州 隊長中

今度上野山内屯集の賊徒追討の節遂勇戦忽及掃撃の條感入の尙成功の次第速に可遂 奏聞の猶此上敵愾の士氣不相弛彌勉勵盡力可有之仍感狀如件

慶應四年戊辰五月廿一日

大總督

因州 伊州 隊長中

右各通

十九日 寺社町勘定三奉行免役

府下取締被仰付置の處今度當分江戸鎮臺被差置の付ての寺社町勘定三奉行所諸記録共明廿日中より悉く引渡の様可致事但奉行の被止の其以下役人の者當分出勤被仰付の

右より付廿日三役所共引渡と相濟み三奉行御役御免

廿三日 官軍賊徒ト武州飯野ニ戦フ

廿二日賊兵八王子遁逃遮斷の爲筑前兵隊直竹へ相備秩父遁逃遮斷の爲川越兵隊秩父路へ相備日光遁逃遮斷の爲筑前兵隊鹿山へ相備へ筑前筑後へ賊窟横撃として双柳より進み備前佐土原大村へ野田より正面へ相進の様軍配成る廿三日曉二字佐土原先驅人間川を渡り笹井村へ出の處賊兵林中へ潜伏砲撃の付野砲小銃の

て壓倒戦の央バ大村爲援兵馳付の處賊兵既遁逃致の併に夜陰にて地理不分賊の伏兵難計の付天明と待ち各藩兩道より伏兵探索相進の處野田村外より賊兵猶又狙撃のへ共衝突進撃平原曠野の出撤兵を布疋の野砲小銃を以て路次の林藪賊の伏兵を進撃し飯能市街の前より至り賊窟能仁寺へ注目呐喊の聲山壑を撼し砲彈如雨雷電の勢を以て瞬息の間能仁寺前より至りへ賊兵小銃のみにて頻に横撃のへ共野砲にて應戦の内大村佐土原各先を争ひ同時賊窟中に入り能仁寺既の烟焰天の漲り喇叭を以て諸藩へ先登を報告致し無程智觀寺並飯能商家も煙焰相漲の商家へ則賊の屯所放火智觀寺へ則兩筑の進撃所放火也依て兩道の兵整頓時刻未だ一字半にも不相成各進撃の路より歸陣の處殘賊竹林中より道路を硬塞發砲のより付各藩應砲通行の處賊兵遁逃跡形も不相見晝一時扇町谷へ歸陣仕の○此日討取處の賊骸山林原野の横り其數不分明生捕共凡五六十人深淺手負數不知○官軍手負左之通座の○備前兵士瀬賀役次郎宗戸久五郎淺手負○佐土原小隊長谷山藤之允淺手負兵士齋藤儀兵衛淺手負○大村兵士岡虎之助淺手負

右戦争の次第御届申上り以上

渡邊 清左衛門

軍監三雲爲一郎小田原ヨリ歸府大久保加賀守ノ反狀ヲ白ス

戊辰

十三

戦国月報

私共兩人軍監として小田原へ被差向ひ處去廿九日水野出羽守へ預の林昌之助  
 其外脱走の賊徒關門へ押寄ひ付中井範五郎へ大久保加賀守人數引纏ひ箱根關  
 門へ出張致し私儀へ小田原に残り居ひ處加賀守家來箱根より立歸り私へ申聞ひ  
 への箱根關門にて戦争の砌中井範五郎並み家來の者へ加賀守人數にて討取ひ間  
 此所へ滞留ひて何時の討取も難計ひ間早々當所立退ひ様申聞ひ付前後の  
 始末何共不相分ひへ共加賀守家來の申次第非禮反逆の條加賀守賊徒と與し軍監  
 中井範五郎を殺害し及びひ事無相違奉存ひ付拙者儀へ直様當府へ歸り申ひ此  
 段言上仕ひ事

廿三日 問罪師ヲ小田原ニ發ス

一大久保加賀守 軍監中井範五郎を殺害し及び始末並み軍監三雲爲一郎を追返  
 し非禮の處置如何の心得有之哉先般林昌之助以下脱走の節對 朝廷不埒  
 の次第屹度御沙汰可被及の處寛大の御趣意を以て其分被差置ひ就て此  
 度翻然可抽忠勤の處無其儀如何の事有之哉屹度詰問ひ間明み返答可有之事  
 來る廿五日午時於大磯宿問罪の返答可及事

問罪使穂波三位 參謀河田左久馬 軍監三雲爲一郎 問罪師因州 長州 備前

伊州兵隊 右今廿三日發足廿五日午前大磯着陣の事

廿四日 七十萬石ヲ以テ德川龜之助ヲ駿州府中ニ封ス

一德川龜之助 駿河國府中城主被仰付領知高七十万石下賜旨被仰出ひ事

但駿河國一圓其余へ遠江陸奥於兩國下賜ひ事

一德川龜之助 今般家名相續被仰出ひ付爲御禮上京可致ひ事

一橋田安ノ兩家ヲ藩屏ニ列ス

一一橋大納言 自今藩屏の列に被加ひ旨被仰出ひ事

一田安中納言 右同文

右三通三ツ折同紙上包

一一橋大納言 今般藩屏の列に被加ひ付爲御禮上京可致ひ事

一田安中納言 右同文

德川家臣ノ官位ヲ止ム

德川家臣の輩自今官位の儀被差止ひ事

右へ御對面所ふ於て大監察使三條左大將殿より後渡ふ相成り參謀西四辻殿並み  
 下參謀軍監列座の事

某氏ヨリ北地戦争ノ景況ヲ報ス

伊達陸奥守上杉彈正大弼南部美濃守丹羽左京大夫松平大學頭阿部美作守相馬因幡守秋田万之助水野直次郎板倉甲斐守松前伊豆守岩城左京大夫田村右京大夫生駒大藏其外三藩都合十七頭閏四月十八日會盟會津を援けの事一一致いたし只今迄官軍方へ差出置の人数一旦引揚の事但右諸侯近日白石城に於て合兵の上大舉進軍相成の事

閏四月十九日參謀衆の由世良某勝見米福島にて被討取り趣此儀極密に相成居のへ共相違無之由に相聞え申の○同月廿日白川城の戦争脱走方勝利にて醍醐様奥州本宮邊より装束を戎服に改られ白川へ被爲赴の處途中危き場合屢有之漸にて福島城へ御入り暫時右所被居の後川船にて仙臺養賢堂へ移り相成の由○九條様に當時養賢堂に御逗留仙臺侯より御叮嚀に取扱有之尤も薩長の人數に退散仙臺家にて警衛の由に相聞え申の同月廿一日野村某福島にて被討の由其外四人程被討の由のへとも駭と相分り不申の○澤三位様羽州へ御出張の處多分養賢堂へ引返し可相成趣薩州大山某羽州にて被討のよし風聞有之の○官軍先頃白川城を攻落し薩兵相相守居の處閏四月廿日會兵に取返されのよし○九條醍

醐の御兩卿を仙臺城へ奉入置の積尤も正邪分明に相成の迄仙會兩藩へ依頼被成度との風聞○閏四月廿四日戦争會兵敗走同廿五日仙會脱兵大舉いたし官軍薩長土大垣忍笠間館林勢と大戦争官軍敗北太田原へ引揚け損傷夥敷のよし○栗橋宿通行の節手負死人船三艘に積み川上より下り由同宿役人の咄なり古河宿にも大垣怪我人多分滞留致し居の○仙臺千五百人程閏四月廿七日迄白川へ繰込の會津より七大隊の人數差出し奥州諸藩悉く出兵進軍の風聞有之の○北地列藩の議論に薩土長三藩の人々と討の旨を朝廷へ申立益勤王にて自ら官軍と稱し由の事○右大事件變革に付右三藩の罪狀取調として仙臺上杉兩家の重臣速にお上京致し由此上如何可相成哉○閏四月廿七日白川白坂口にて官軍と會兵と戦争有之のへとも勝敗未だ相分らざるの○同廿九日四時頃今市より會津へ越ゆ途中國境新道といふ所に於て官軍方二千余人と脱走會津の人數と大戦争有之の處官軍方敗走のよし○普魯士人二名會津へ來り三兵傳習器械製造且金銀山を開きゆに付若松城下盛に相成ゆに佐越邊通用金銀多分會津出來を相用る申の右普魯士人の本國脱走いたし者の由相唱ゆへ共實に其國內命に依てなりと云○閏四月廿九日頃越後口官軍米山邊にて會兵並に脱走兵と戦争其節雲霧嗅隠にて信州の官軍



方薩長勢を敵兵と見違へ横合より砲撃夫故官軍敗走して鉢崎邊迄引ひよし實否未だ詳ならず

奥羽ニ於テ改元ノ説

年號延壽と改元ありことの風聞盛なりと雖も未だ確證を得ず

幹事役ヲ勝安房守織田和泉守等ニ命ズ

一勝安房守織田和泉守山岡鐵太郎岩田織部正 右幹事役被仰付ひふ付御政事向

へ關係致し御用向へ都て取扱ひ間可被得其意ひ尤も爲心得相達可然向々へ

寄々及噂置ひ様可被致ひ事

○六月

五日 徳川家ヨリ自今扶助ナリ難キニ就キ朝臣或ハ暇ヲ請フヘキ

ノ旨ヲ一藩ニ示ス

綾雄殿渡書付 御領知高相定りひふ付てハ多人數の御家來ハ扶助行届難被成

ひ間不便至極ハ思召ひ得共無據係切米係扶持方ハ役金等都て係手當まで當六

月分よりの係渡方相成兼ひ間銘々進退の儀勘辦致し朝臣相願ひとも係暇相願ひ

共決定の處頭支配より速し承紮被申聞ひ様可被致ひ但知行所取の面々も同様可

被心得ひ

右之趣組支配有之面々へも不洩様可被達ひ

十八日 朝鮮國騷動ノ旨對州ヨリ届書

當四月十八日朝鮮國京畿道の屬島永宗と申所へ大英國の船一艘致來泊入數百餘

人上陸主管の者致出應ひ様申聞則永宗の檢使申孝哲と申者致應接ひ處驕慢無禮

の振舞ふ付檢使にハ直ハ引返し潛し軍令を傳へ伏兵を設け賊と要地ハ引請斷然

及接戦ひ處賊軍大ハ敗走竟ハ巨首二人を斬り從卒凡八十人程射殺し殘黨脚船ハ

飛乗或ハ沈海或ハ游泳僅に本船に遁歸り無程同所出帆仕ひ由尤も朝鮮國人民死

傷の者無之段彼國役人より對馬守家來へ内分申出ひ間此段係届申上ひ以上

六月十八日

宗對馬守内 扇 源 左衛門

徳川家ノ醫師及ヒ奥女中等ノ賜地ヲ褫フ

一徳川龜之助家來へ 朝政御一新し付江戸鎮臺府被差置ひし付てハ徳川家臣始

醫師奥女中其外用達町人半人等ハ至迄役義並身分ハ付或由緒ハ寄り江戸町地

の内拜領其外借地等申付有之分今般上地被仰出ひ間其段可申渡ひ尤も御沙汰

の趣御一新の折柄兼て銘々心得も可有之儀ハ付地代金等の儀ハ速し係處置可

有之處左のハ積年受領罷在の儀は付差向及難儀の者も可有之哉お付格別寛大の儀處置を以て當辰一ヶ年の地代は是迄の通被下の間其段可申渡り且朝臣被仰付の輩受領地是迄通り被下置の儀改て被仰渡り事と可心得事  
但先前相對を以て買入の抱屋敷等係構無之別段御沙汰無之の間銘々勝手次第たるべく且上地被仰付の者も速に地面引拂ひ及不申の事

○七月

朔日蝕晝九時八分ヨリ八時一分ニ終ル  
江戸郭外ノ邸宅解除或ハ賣却スルヲ許ス

一徳川龜之助重役へ御用有之の條係郭内屋敷の儀は是迄建來の儘差置の儀可致の儀郭外建家の儀ハ解除の共不苦の地面の儀ハ賣買一切不相成抱屋敷の儀ハ賣拂の共可爲勝手次第事但脱走等致し揚屋敷は相成ひ分ハ一切其儘差置の儀可致事

徳川家駿州移住ニ就キ從者家族人員ヲ調フルノ達

駿河御入移の儀は付てハ兼て相達の通彼地より申越次第お寄り鎮臺府へ迄伺の上迄支度相整ひハ上様御移越可被仰出就てハ多人數の御家來一時は被召連の

儀ハ迪も難相成の間係供係先勤其外彼地宿割等取調の上追て可相達の間頭支配方心得居其段相諭の儀可致事

此度駿河表へ御移越相成ひお付てハ在職の者ハ不殘被召連の尤も出立日限の儀ハ猶又可被仰出旨次郎八段被仰渡り右之通被仰出の間駿河表へ係供被召連の者並ハ係跡より被召連の者家族家來小者等人數取調べ半紙整帳ハ相認め早々拙者共へ可被差出の事

七月

白戸右助  
平岩庄七  
櫻井庄之助

武家邸ニ於テ商賣スルヲ禁ス

鎮臺府より被仰出の間係趣意の趣堅く相守り町人共へ屋敷長屋等貸置或ハ屋敷如市店改め賣買の儀ハ一切不相成の間右貸置の町人ハ早速爲引拂可申の都て屋敷々々お於て賣買の儀ハ不相成事お右之趣組支配有之面々へ可相觸武家屋敷を賣人へ貸の儀前々嚴禁有之の處當春以來相弛み猥ふ町人へ貸置の趣も相聞え右の人別調並ハ支配所自他の差別を失ひ不取締の筋お付以來ハ武家地へ商人共差置の儀一切難相成是迄貸置の分も早々町地へ引移の儀可致の若し家來など申

唱へ差置ゆるもの並み人別紛敷もの差置ゆる調の上急度可及沙汰の  
右之通被仰出ひ間向々へ可相觸ひ  
御郭内屋敷の分家作其儘差置ゆる様此程鎮臺府より被仰出ひ付其段早速申達置  
ひ處中に御趣意心得違ひ哉御郭内住居の家作取毀ひ向有之哉相聞え以外の  
事ふひ右様朝命ひ背ひ様の儀有之ひて御家の御瑕瑾にも相成ひ間向後猶御趣  
意不奉者へ急度嚴重の御沙汰可有之ひ條此段兼て心得可罷在ひ  
右之通御家來中へ可相觸ひ

廿三日 前將軍駿州寶臺院ニ移ル

左門殿渡善付 前上様御事去十九日水戸表御發足同廿一日銚子浦より乘船海  
路無滞同廿三日夕駿河寶臺院へ着被遊ひ間爲心得可被達置ひ事

徳川家駿州府中ニ移ルノ旨ヲ其臣下ニ達ス

次郎八殿渡書付 來る九日當地御發途駿府城へ移越被遊ひ旨被仰出ひ此段係  
家來中へ可被相觸ひ

東京鎮將府ヲ三條右大臣ニ命ス

大總督官鎮臺被免 三條右大臣鎮將府被仰出ひ事

鎮將府ヲシテ駿河以東十三國ヲ管セシム

今般於東京當分鎮將府被立置駿河以東十三國駿豆相武房上下總甲常上下野奥羽  
可爲支配被仰出ひ間此段相違ひ事但自今鎮臺府の稱被廢ひ事

一駿河以東十三ヶ國諸侯及中大夫上士等上京並歸國共一々鎮將府へ可届出事  
一同上諸願届等の儀總て鎮將府へ可差出事

一駿河以東十三ヶ國諸藩公務人一兩人宛東京へ可相詰ひ事但相詰ひハ早々鎮  
將府へ可届出事

右之通被仰出ひ事

奥羽ニ於テ討死官軍ノ靈ヲ祭ル

當春以來征討奮戰忠死の靈來る十日十一日兩日於河東練練場祭典式被仰出ひ事  
右ふ付十日巳の刻より申の刻迄十一日辰の刻より未の刻迄の内諸官參詣可爲勝  
手事

右刻限の内諸人參拜被差許ひ並有志の輩詩歌を供し且兵隊練練式等慰靈魂ひ  
儀可爲勝手事

但靈前詰の者へ夫々相斷り不及混雜様可致事且 朝廷御祭奠金下賜ひハ地

方より料物奉納の儀被止む事

徳川家暇ノ臣浪人名義ヲ唱フルヲ禁ス

此度係暇相願ひ者共不慙お被思召ひへ共不被得止任其意係暇被下ひ依てハ爾後生計の爲め農工商お相成ひ者も可有之右ハ先達て鎮臺府へ係伺お相成ひ處農工商お相成ひ上ハ府縣ハ裁判所おて係支配有之趣御沙汰おひ間係暇相願ひ面々農工商お相成度ものハ何れの市町何れの郡村へ轉移産業營ひ儀元支配へ可申立頭支配お於ても係留守居へ申談ト不都合の筋無之様取扱遣と浪人の名義ハ不相成趣御沙汰おひ且此度係暇お相成ひ共役々明有之節ハ係召返との義も可有之條此段兼て相心得可罷在ひ

右之趣家來中へ不洩様可被相觸ひ

江戸ヲ稱シテ東京ト曰フ

朕今萬機ヲ親裁シ億兆ヲ綏撫ス江戸ハ東國第一ノ大鎮四方輻輳ノ地宜ク 親臨以テ其政ヲ視ルベシ自今江戸ヲ稱シテ東京トセン是 朕ノ海内一家東西同視スル所以ナリ衆庶此意ヲ體セヨ

議定參與等ノ職ヲ置ク

一鎮府

右東國事務ヲ總裁ス

一議定 參與

右立法ノ權ヲ執リ議政官ノ體ニ法ルベシ

一辨事 判事分課 軍務 會計

右行法ノ權ヲ執リ行政官ノ體ニ法ルベシ

一史官 筆生

右鎮將被差置東國政務御委任被仰付候ニ付十三ヶ國駿豆相武房上下總甲常上下野奥羽管轄致シ諸藩ノ事件ニ至ル迄總テ取扱致シ可申尤モ大事件ハ時遂奏聞ヲ候様被仰付候事

一東京府 知府事 判府事 權判府事

京攝ハ申ニ不及諸府縣ニ至ル迄政務一定ノ規則被爲立候御趣意ニ付彼是齟齬不致様被仰出候事但諸藩ニ於テモ御趣意ヲ奉體認右政体ニ法リ追々改革終ニ天下一定ノ規則相立候様ノ心懸可爲肝要候事

秋田萬之助老臣歎願書並ニ薩藩添書

去廿四日長州土州大垣等の人數と同一弊藩諸隊も棚倉へ繰出し廿六日三春表へ  
發向仕の處三春重役共送み出迎別紙之通歎願書差出の付城下迄入込の處更  
敵對者一人も無之彌恭順無相違相見の折柄翌廿七日岩城平より被差廻の官軍來  
着し付尙申談し追々奥地へ進撃の積み座の由同藩出先の輩より申越の聞此段  
御届申上の以上

七月廿九日

薩州 相良 治郎

別紙

今般主人萬之助謝罪歎願書差上のみ付家來共役場罷在にて奉對 天朝恐入  
奉存のみ付諸役場政事向金穀等迄總て奉差上寺院在任謹慎罷在の様仕度奉存の  
右之段何分にも御執成被成下宜敷御指揮奉願上の以上 家老 共

○八月

朔日 黒羽藩本官驛賊徒追討ノ旨届書

去る廿四日朝第五字釜子陣屋出發兼て御軍議の通り棚倉表發向の各藩同時石  
川村へ着陣翌廿五日忍藩弊藩殿被仰付同村を發し蓬田村へ着陣翌廿六日朝第二  
字同所發向秋田万之助降伏の付三軍三春城下へ乗入り同廿七日本官驛打入り先

鋒可致旨御達の付十一字同所進發勿論斥候五人差出の處逢隈川手前より川を隔  
て打合の趣注進し付直し同所へ人數手配仕の處土州藩從間道川際迄進の處弊藩  
も共の相進及戰爭のへ共右川渡兼の間弊藩小隊長渡福之進益子四郎兩人川游さ  
船を奪取忽人數打渡り本官驛乗取の賊兵二百人程一里或の半里迄去土州藩一同  
追討仕の其節討取別紙申上の同廿八日朝第七字二本松忍藩弊藩番兵所へ賊兵多  
人數襲來り直の追退の處郡山街道筋林藩持口頻の苦戰の由報知の付高橋亘理隊  
半隊爲援兵差出し暫時戰爭仕の其内賊勢敗走の付半里程追討の上凱陣仕の同廿  
九日二本松へ進軍の付殿被仰付のへ共爲大斥候五字頃一小隊差出申の及戰爭別  
紙之通討取分捕且戰死の者座の餘の爲殿彦根藩忍藩大垣藩筋林藩一同落城後  
着陣仕の此段後届申上の以上

本官驛戰爭の節賊兵打取十一人 二本松戰爭の節賊兵打取六人戰死一人

八月朔日

出兵隊長

大關泰次郎家來

五月女三左衛門

五日 奥羽ニ於テ戰士ノ死傷諸藩ヨリ届書

一 佐土原藩届書抄 六月廿八日於奥州新田坂戰死一人手負三人○六月廿九日於  
湯長谷手負三人○七月十三日於奥州磐城平戰死五人手負五人

一同日薩州藩届書抄 七月十三日磐城平攻撃途中磐前郡中山に於て戦死二人手負三人同城攻の節手負廿七人同時分捕大砲一挺其外數品

一因州藩届書抄 七月十三日湯長谷大橋向觀音山邊戦争討死四人手負十八人

一備前藩届書抄 六月廿八廿九日湯長谷邊戦争討死三人手負二人○七月十三日討死五人手負六人

一柳川藩届書抄 六月廿八日戦争の節生捕一人小銃玉藥數品手負五人○七月十三日討死二人手負十七人

一伊州藩届書抄 七月廿九日浪江宿邊戦争討死五人手負九人

一筑州藩届書抄 七月廿八日奥州富岡より瀨手間道新田原邊戦争翌廿九日熊野町浪江邊戦争討死十一人手負三十六人

薩藩二本松ヲ攻撃ノ旨届書

三春表より一里計有之糟沼と云二本松領へ賊兵屯集の由付廿七日夜二字頃より弊藩二百余人土州兵と共に進撃五六十人討取本宮迄追討致し引揚け同日より廿八日迄の間長州備前彦根黒羽大垣上州及弊藩人數等阿武隈川押渡りて本宮小瀨の兩所より泊り廿九日曉五字双方より二本松へ押寄せし處城より十四五町可

有之場所より賊兵砲臺と構へ嚴敷防戦しへ共官軍烈敷攻懸り一時打破り直様城にお懸ひ處大手前にて少々砲戦しへ共間も無く賊徒逃去り火を懸け福島會津街道指て落行し付直様官軍不殘城下へ繰入申ひ此日打取百四五十人程慥お不相分ひ弊藩戦死手負左之通お座座の間此段係届申上ひ以上

戦死八人手負二十人

米金ヲ徳川龜之助ニ下賜ス

一徳川龜之助へ 今般駿河へ引移し付淺草御藏お圍有之の銅鉄御下渡願出ひ得共不得其理し付御聞濟無之依之格別 御仁恕の思召を以て別紙之通被下置ひ事

別紙

今般駿河へ引移し付格別の思召を以て米三万俵金二万兩下賜ひ事

六日 彦根藩届書

七月廿六日拂曉弊藩先手分隊田母神村出發三春へ進軍仕ひ處解城降伏相成ひ間同夜先鋒館林弊藩人數にて城受取申ひ其節殘賊散亂致し中別紙之通生捕分取仕ひ趣三春出先より申越ひ條此段係届申上ひ以上

福島藩一人仙臺藩五人都合六人生捕其外鉄砲彈藥等分取

八月

彦根 河手 主水

徳川家臣ノ朝臣ト爲ル者ノ祿ヲ定ム

- |           |       |           |      |
|-----------|-------|-----------|------|
| 万石以下五千石迄  | 千俵宛   | 五千石以下三千石迄 | 五百俵宛 |
| 三千石以下千石迄  | 三百俵宛  | 千石以下五百石迄  | 二百俵宛 |
| 五百石以下三百石迄 | 百五十俵宛 | 三百石以下二百石迄 | 百俵宛  |
| 二百石以下百石迄  | 五十俵宛  | 百石以下四十石迄  | 四十俵宛 |
| 四十石以下先前の通 |       |           |      |

右是迄俵取の者同斷且扶持米ハ被廢ヒ事

但最初歸順並ハ實効有之者不在此例事

別紙之通被仰出ヒ付來九月より高ハ應ト割合を以て藏米被下置ヒ付同朔日より辰の口外元傳奏屋敷會計局へ爲請取可罷出事

徳川家臣無祿勤仕ヲ請フ者ハ駿州ニ移住スルヲ許ス

此度見込有之無祿にて自己の入用を以て生計相立聊係厄介相懸不申係領地の内差向駿河表へ引移り度者ハ差許相成ヒ間道中混雜無之爲出立頃合の儀掛り

大目付係目付へ早々可申出ヒ差向さ上ケ屋敷等被仰付住居差支難儀の向ハ當分の内紀州御屋敷へ被差置ヒ答ハ付其段兼て心得可罷在ヒ

右之通相違ヒ付てハ引移り相願ヒ者ハ御印章願受の手續並ハ紀州御屋敷へ被差置ヒ分ハ長屋割付等の儀ハ有之ハ間委細ハ掛り係目付可被談ヒ

勅シテ勳功式二二三等ヲ定ム

賊徒追討官軍進發己來所々奮戰堅キヲ拔キ銃ヲ挫ク其忠勇義烈達 天聽 勅感被爲在猶又諸軍現地ノ勳功被爲 知食臣子ノ龜鑑ニ被備度 勅旨ヲ以テ今般別紙之通豫メ勳功ノ等級御定ニ相成候條督府列藩及參謀軍監長官等現地ノ事蹟精密取調へ偏頗彼我ノ見ヲ去リ公正至當ノ議ヲ以テ諸軍各部其等級ヲ判シ姓名書差出候様被仰出候事

但御褒賞ノ儀ハ大總督官及諸道總督歸京被奏成功之上 御沙汰有之候事

行政官

勳功式三等

總督 副總督參謀等之ニ準ス

上 功

能ク衆議ヲ容レ畫策籌謀其宜ヲ得以テ大ニ四方ヲ鼓舞シ終ニ天下平定ノ績ヲ底  
スモノ上功トス

中功

能ク一方ヲ維持シ以テ強敵ヲ挫キ終ニ天下平定ノ業ヲ助クルモノ中功トス又諸  
隊ニ拔ンテ賊衝ヲ奪ヒ全軍長驅ノ勢ヲ逞セシムルノ類之ニ準ス

下功

以多當寡勝敗亡獲相等キ者下功トス又營壘要地等ヲ固守シ全軍ノ潰敗ヲ維持ス  
ルノ類之ニ準ス

一司令官 諸隊長之ニ準ス

上功

使令其宜シキヲ得其隊ヲシテ同心協力進退坐起自ラ法ニ合シ以テ大敵ヲ破リ要  
地ヲ拔キ全捷ヲ取ルモノ上功トス

中功

寡ヲ以テ衆ヲ挫キ諸隊之カ爲ニ勇奮振起其力ヲ終ニ全軍ニ及ホスモノ中功トス  
下功

率先勇進スト雖モ隊下死傷多キモノ概シテ下功トス或ハ強敵ヲ受ケ所部ヲ指揮  
シ營壘要地等ヲ固守スル者之ニ準ス

上功

奮戦衆ニ超ヘ堅キヲ摧キ銃ヲ挫キ其身銃丸鋒鏑ニ罹ルモノ上功トス又勇進シテ  
衝敵斫墨終ニ命ヲ殞スモノ或ハ率先奮激終ニ敵ヲ破リ良ヲ獲ルノ類或ハ其他敵  
ノ大砲要器ヲ擊壞シ輜重糧食ヲ捕拿スル者亦之ニ準ス

中功

勵戦衆ニ先タテ或ハ一隊一殿シテ力戦部伍ヲ収メ其身重創ヲ被ルノ類概シテ中  
功トス

下功

敵軍披靡勢ニ乘シ追撃シテ首級ヲ獲ル者下功トス又力戦創ヲ被ルモノ之ニ準ス  
○九月

四日 更ニ徳川家ヲ駁遠參七十万石ニ封ス

一徳川龜之助 其方領地七十万石駁河國一圓其餘於遠江陸奥兩國下期ハ曾被仲  
出置ハ處陸奥國ハ目今未至平定ハ付今般改テ別紙之通駁河一圓其餘遠江三



河兩國の内ふ於て都合七十万石下賜の旨被仰出の事

駿河遠江國の内御渡相成の高

高二十三万六千三百六十石餘

是の先達て御渡相濟の分

高十六万四千五百七十八石餘

是の此度高附目錄御渡相成の分

合高四十九万九百三十八石餘

是度御渡可相成取調高

高十七万九千五百二十一石餘

遠江國 諸侯領

高三千五十七石餘

駿河國 久能山神領

合高十八万二千五百七十八石餘

高二万九千百十四石餘

三河國 御料

高八万七千三百六十七石餘

同國 旗下知行

合高十一万六千四百八十二石餘

總高七十万石

以上

徳川家ヲ駿遠參ニ封スルニ就テ遠州諸侯ノ封地ヲ換フ

一井上河内守 今般所替被仰出の付領分遠江國高五万七千六百石餘上地被仰付

代知の儀の追て御沙汰可有之事

一太田備中守 右同文 高四万七千七百五十三石餘

一西尾隱岐守 右同文 高三万二千六百八十六石餘

一田沼玄蕃頭 今般居所替被仰出の付領分遠江國高一万二千二百四十三石餘上地被

仰付代知の儀の追て御沙汰可有之事

一阿部美作守 今般村替被仰出の付領分遠江國高一万五百八十一石餘上地被

仰付代知の儀の追て御沙汰可有之事

一松平和泉守 右同文 高五千九百九十石餘

一内藤金三郎 右同文 高四千三百二十九石餘

一増山對馬守 右同文 高六千八百四十八石餘

一青山左京大夫 右同文 高一万二百四十八石餘

一大河内刑部大夫 右同文 高六千五百六十五石餘

五日 上杉齊憲謝罪歎願書

臣齊憲恐惶頓首泣血奉歎願。今般會津御征討の初名分順逆を誤り於出先家來共  
抗官軍奉惱。宸襟の段恐懼至極。臣子の分不相立先非悔悟今更何共可奉申上様も  
無座次第臣乍不肖も素より奉抗敵。朝廷の存意の毛頭無座座へ共全く遠境  
隔絶の僻土の罷在春來天下の事情形勢も一々承知不仕恐多くも厚き。叡慮の旨  
も具お奉伺遂は右様の事件より立至り畢竟臣兼て指揮不行届より所致にて如何  
共重々奉恐入の次第お付此上へ本城お罷在ひも甚奉恐入の間速は城外へ退去謹  
慎恭順罷在即出張兵隊長參謀臣へ嚴敷謹慎申付奉仰。朝裁舉闔藩誓天地勤。王  
の外他志無座座お就ては同盟の列藩へも早速降伏謝罪爲仕ひ様説得盡力仕り罷  
在ひ間悔悟謝罪の藩々へ一同御寛典の處置被成下ひ様冒萬死偏は奉歎願ひ誠  
恐誠惶謹言

藤原齊憲

上杉茂憲賊徒追討先鋒ヲ請フ歎願書  
臣茂憲泣血再拜。大總督府御執事迄申上ひ春來事情形勢不通より抗官軍今更何  
共奉申上様無座座の段先達て父齊憲以家來重而奉歎願の節以佐竹中將父齊憲へ  
被仰渡ひ御討文の趣奉拜讀如何にも如嚴命會津容保御征伐お付ては重き御沙汰  
も乍奉蒙遂お今日の形勢より立至り亂臣賊子の刑典難道今更措身の地も無座座の

朝廷寛典の處置を奉仰ひ處恐多くも先達て歎願の次第ハ一ト先ッは聞届被  
成下猶此上勤。王の實効相立可申旨御沙汰寛仁の御趣意何と可奉申上様も無座  
座奉感佩ひ此上へ是非お鞠躬盡力勤。王の實効を奉表度志願ひ座座の處差當り  
降伏謝罪不仕藩座座お付右御先鋒等被仰付ひは上下一同盡死力奮戦仕り奉  
報鴻恩萬分之一度奉存ひ何卒は聞届は相成り此上寛典の御沙汰被仰付於被下置  
は冥加の至り難有奉存ひ此旨宜くは取成の程不顧多恐奉歎願ひ誠恐誠惶頓首

藤原茂憲

請ニ依テ賊徒追討ヲ上杉茂憲ニ命ス

上杉齊憲父子悔悟謝罪の儀申出城下へ謹慎。天裁を奉待ひ段へ早速。御奏聞被  
成置ひ處今般式部儀當表へ罷出賊徒追討の先鋒相勤め謝罪の實効相顯は度旨歎  
願の趣は聞届被成ひ間迅速出張は指揮は隨ひ賊徒追討可致旨御沙汰の事  
但賊徒と雖も兼て寛大の御趣意お有之の事故致歸降の者へ敢て不殺相應お扱  
ひ置可申。御奏聞の上何分の御沙汰可有之の事

慶應四年ヲ改メテ明治元年ト爲ス

今般 御即位 御大禮被爲濟先朝之通被改年號候就テハ是迄吉凶ノ象兆ニ隨ヒ

慶應四年閏七月  
慶改號有之候へ共自今御一代一號ニ被定候依之改慶應四年可爲明治元年旨被仰  
出候事

東京ニ行幸ノ御達

東京 行幸御出輦來る廿日御治定之事

德川家舊臣ノ門扉ニ上地受領地歸田等ノ標札ヲ掲クヘキノ達

駿河御供並ニ御領地中へ罷越ハ家來其外上ケ屋敷の儀ハ付鎮將府より御沙汰の趣も有之ハ間來る十一月中迄御猶豫の儀ハ願立相成ハ處十月限たるべき旨ハ沙汰ハ付東京府ハ屋敷詰の外ハ郭内外ハ不拘勤仕不勤共其心得を以て早々ハ當地引拂ハ様此節より速ハ手續可致就テハ屋敷取調ハ都合も有之ハハ付朝臣願の者始めハ暇歸農相成ハ分共別紙雛形之通來る廿日迄ハ無遲滯銘々屋敷門扉へ懸札致シ置右懸札差出ハ速期月以前急速屋敷被召上ハ儀ハ無之旨是又御沙汰有之ハ間其趣を以て可被心得ハ  
右之通鎮將府より御沙汰有之ハ間御家來中へ早々可被相觸ハ

懸札圖畧ス

但歸田上地同受領地同上地之内借地等なり

德川家臣駿州移住ノ者ハ印章ヲ請クヘキノ達

御領地移住の者出立頃合の儀兼々相達置ハ共差向彼地出立出來ハ者ハ可成丈  
手操致シ引拂ハ様人馬遣等の儀ハ取調ハ掛リハ目付ハ承合可申ハ御印章願方の  
儀ハ掛リハ目付取扱ハ管ハ付田安御館中の口ハ自身可罷出ハ御領地ハ相越ハ上  
ハハ扶助の儀聊成トモ被成遣度厚シ御趣意も有之ハ間其旨相心得精々手續致シ  
早々出立ハ様可被致ハ  
右之趣支配組の者ハ早々可被達ハ

德川家臣ヲシテ今年十月ヲ限リ東京ヲ退カシム

駿河御供並ニ御領地中へ罷越ハ家來其外上ケ屋敷の儀ハ鎮將府より御沙汰の趣も有之ハ間來る十一月中迄御猶豫の儀ハ願立相成ハ處當十月限九るべき旨御沙汰ハ事

東京府御屋敷詰の外御郭内外ハ不拘勤仕不勤トモ其心得を以て早々ハ當地引拂ハ様此節より速ハ手續可致ハ

十二日 丹羽左京大夫歎願書並ニ添書

聖上益御機嫌能被爲渡恐悅至極奉存ハ各官方彌御安全珍重存ハ然ハ公董儀一昨

十日二本松へ着陣仕ひ此段係届申上ひ

二本松舊主丹羽左京より別封歎願書備前持場番兵所へ差出ひ付參謀渡邊清左衛門段々取調ひ處相違無之旨尙評議の上右一紙寫し通達致置ひ尤も先達係布告通り器械彈藥取揚げ本人東京へ護送可仕ひ勿論あひへ共何分即今一人にて入用の兵隊あひ間迎も其運びに難相成且左京儀の昨夏以來大病追々快氣の方よひへ共全快と申程も無之趣あひ器械の儀只今取揚ひ易くあひへ共實効相立ひも差當り器械無之ひて不相叶ひ間是又評議の上暫く預置ひ是の段々情實も有之米藩と共々賊徒防禦の爲め福島邊へ出張仕居ひ趣あひ

米藩謝罪歎願書昨今指出答ひ處仙臺より願の儀も有之彼是遅延お相成居ひよあひ越後口督府へ過日息男軍門お降伏罷出ひ趣あひ間相違無之と存ひ右二ヶ條巨細の儀の清左衛門より大村吉村等へ逐一可申ひ間委細御聞取可被下ひ其外米澤以下情實も兩人へ同人より可申入ひ仍早々如此今日ハ當表固場等所々巡見罷出ひ付甚繁多取紛居要用迄申入ひ福島屯集の賊ハ不日必戦争よ可及と存ひ尙後使可申入ひ亂筆可被免ひ也

大總督府參謀御中

公 董

二本松歎願書 今般私儀各分順逆を誤り奥羽各藩同盟仕り抗官軍終お土地人民と失ひ何共可奉申上様無係座深く奉恐入ひ上杉彈正儀ハ同盟最密の儀よ付一先米澤表へ罷越ひ處同藩より厚く 叡慮の程奉傳承恐縮至極奉存ひ素より奉抗敵朝廷存念毛頭無係座ひへ共舊邑の儀ハ全遠境お罷在春來天下の事情も隔絶仕り恐れ多くも厚き 叡慮の程も具お不奉伺一時の行違より終お近日の仕儀お立至りひ段誠お以て奉恐入先非悔悟仕ひ隨てハ兵器悉く差上舊領寺院へ立戻り恭順謹慎罷在家來末々迄急度謹慎申付奉仰 朝裁度奉歎願ひ此上ハ御寛典の爲處置被成下ひ様偏よ奉歎願ひ誠恐誠惶謹言

丹 羽 左 京

日野源太左衛門 左京歎願趣委細被遊聞届ひ就てハ即今の實効相立ひ様可致依之猶御沙汰ひ迄の間銃器ハ其許へ係預け左京ハ舊領寺院へ謹慎可相達此段被命ひ事但器械彈藥目錄可差出ひ事

白川口總督參謀

十四日 徳川家脱艦美加保丸下總國銚子港ニ漂着ヌ  
徳川家脱艦美加保丸下總銚子港へ漂着同所へ上陸處々へ散亂の内榎本和泉成瀬

藤十郎大河八十郎中原登人見勝太郎大原金五郎伏見喜之助本山小太郎中根造酒之助外撒兵の者奥州表へ逃去ひ趣召捕乗組の者及白状ひ右之次第付各藩申合嚴重探索取締可致ひ事

先般脱監美加保丸爲風波下總銚子港へ漂着ひ處乗組人數の内多分溺死其餘上陸散亂致し猶土浦藩五十人餘召推猶又墨田川よ於ても召捕數十人よ及び其餘沈没も不少然處殘賊共終り總房の間へ潛伏致し銘々小銃所持致しへ共最早彈藥の有之間敷各藩申合せ精々捕縛方盡力可有之ひ事

廿日 徳川家臣ニ朝臣ヲ願フ日限ヲ達ス

先般以來徳川舊臣共迄扶助相願ひ者迄採用被爲在ひ付同家重役共へ取調可申出猶又銘々直さひ可願出旨懇々御沙汰相成ひ處今以方向取失或一時邪論を主張して奉命不致近日お至り自己の活計お差支ひより追々願出ひ者も有之趣際限も無之而已ならせ右様心得違の者不埒の至ひ付奉公願出ひ者來る廿五日限たるべく其後願出ひ者一切係採用無之旨御沙汰ひ事

廿三日 遠州諸侯ニ安房上總兩國ニ於テ換地ヲ賜フ

高四万三千五百六十石餘 安房國平郡朝夷郡長狹郡上總國望陀郡周准郡

西尾隱岐守

右者先般上知被仰付置ひ代知として頭書之通下賜ひ旨御沙汰ひ事

高一万二千二百七十石餘 上總國天羽郡周准郡 田沼玄蕃頭

右同文

高六千八百五十石餘 上總國周准郡 増山對馬守

右同文

高六万二千百石餘 上總國市原郡埴生郡長柄郡 井上河内守

右其方領地下總國下野國領知高今般上知被仰付右代地並先般上知被仰付ひ遠江國領分爲代知頭書之通下賜ひ旨御沙汰ひ事

高五万三千三百石餘 上總國夷隅郡 太田備中守

其方伊豆國領知高今般上知被仰付右代知並先般上知被仰付置ひ遠江國領知爲代知頭書之通下賜ひ旨御沙汰ひ事

高九千八百六十石餘 相模國愛甲郡 大久保中務少輔

其方伊豆國領分高今般上知被仰付右代知並先般上知被仰付置ひ駿河國領分爲代知頭書之通下賜ひ旨御沙汰ひ事

嘉永元年閏金卷十七  
我  
自  
升  
我  
書  
屋

高六千六百八十石餘 上總國望陀郡 大河内刑部大輔

右者先般上知被仰付置ひ代として頭書之通下賜ひ旨御沙汰事

高五千百八十石餘 安房國平群郡長狹郡 松平和泉守

右同文

織田兵部歎願書

臣信敏恐懼頓首奉歎願ひ先頃奥羽各藩相從出兵等仕自然奉抗 官軍事立至りひ處此度上杉彈正より厚き 叡慮の程奉傳承恐懼至極奉存ひ素より勤 王の外他事無座座得共臣若年暗昧且遠境隔絶事情通徹不仕一旦名分順逆相誤 奉惱 宸襟恐懼至極先非悔悟何共可奉申上様無座座隨て臣始家來未々迄恭順 謹慎罷在謝罪仕ひ此上奉仰 朝裁ひ何分宜敷處置被成下度偏ひ奉歎願ひ誠恐 誠惶頓首

九月十八日

織田兵部少輔

廿四日 薩藩伊地知正治會津攻撃ノ景狀ヲ報ス

其後日夜攻撃不止ひ故賊徒遂及窮迫去る廿二日松平肥後父子軍門あ来て降伏 當時妙國と云梵宇ノ蟄居謹慎同日大小の砲器不殘差出り廿三日家來不殘猪苗代

ひ引退大小相渡謹慎今日城請取の都合相成申ひ抑當城ハ方五六町位の平城あひへ共石垣の曲折巧し妙と得殊あ必死の兵を以大砲五十門小銃二千八百挺中々 數月の間あ可攻落あ無之ひへ共初め討入の砌殊の外急速めて糧米火藥を城中へ 不運入ひ内あ攻寄致放火ひ故老若男女五千の者共食用あ困み數千挺の銃砲ハ彈 藥あ乏く攻圍三十日として落城あ及び畢竟諸將兵士の勉勵と 皇運の天幸あ由 る處と奉存ひ今日須磨敬次郎平田伊藏兩士差立ひ付不取敢此段得貴意ひ以上 九月廿四日 伊地知正治

大久保一藏殿

松平容保並老臣ヨリ歎願書

松平肥後守願書 臣容保乍恐謹て奉言上ひ拙臣儀京都在職中蒙 朝廷莫大の鴻 恩ながら万分の微衷も不奉報其内當正月中於伏見表暴動の一戦旨意行違不憚近 畿奉驚 天聽深く奉恐懼ひ爾來引續今日迄連々奉抗敵 王師僻土頑陋の訛誤今 更何共可申上様無座座實あ不容天地の大罪措身あ無所人民塗炭の苦爲受ひ次第 全容保の處置あ座座へハ此上如何の大刑被仰付ひとも聊舊恨無座座臣父子 並家來の死生偏あ奉天朝之 聖斷但國民と婦女子共あ至りひて元來無知無罪

嘉永元年閏金卷十七 戊辰 二十九 我  
自  
刊  
我  
書  
屋

の儀ハ座座ハ一統の修赦免被仰出の様伏て奉歎訴の仍之從來の諸兵器悉皆奉差上速の開城 官軍御陣門へ降伏奉謝罪の此上方一も 王政御復古出格の御憐愍と以て至仁の御寛典於被仰付の冥加の至り難有奉存の此段大總督府御執事迄冒万死奉歎願の誠恐誠惶頓首再拜

慶應四年九月

源 容保 謹上

同重役歎願書 亡國の陪臣長修等謹て奉言上の老寡君容保儀久々京都に於て奉職罷在寸功もなく蒙無量之 天眷万分の一も未奉報 隆恩剩へ觸 天譴遂に今日の事体に立至り容保父子城地差上降伏奉謝罪の段畢竟微臣等頑愚疎暴にして輔導の道を失ひの儀今更哀訴仕ひも却て恐多き次第の座座にへ共臣子の至情實の難堪奉存の間代て臣等を被處嚴刑被爲下置度奉伏冀の何卒容保父子蒙 聖慈寛大之 御沙汰の様係執成被成下度不願忌諱泣血奉祈願の臣長修等誠恐誠惶頓首再拜

萱野 權兵衛 長修 梶原 平馬 景武 内藤介右衛門信節  
原田 對馬 種龍 山川 大藏 重 海老名 郡治 季  
井深茂右衛門重常 田中源之進 玄 倉澤 右兵衛 爲

外諸臣共一同謹上

○十月

御着輦奉迎道筋等ノ達

御着輦御當日奉迎場所○議定以下三等官以上坂下御門外北側○四等五等官和田倉御門外北側○無役諸侯坂下御門外南側 但當日不及登城翌日巳ノ刻登城可伺天機且供奉の外兵隊召連の儀被差止の間定式の外供連不相成の事  
右之通御治定相成の條混雜不致様可相心得旨御沙汰の事

御鳳輦御道筋 品川より大通り吳服町通り吳服橋御門和田倉御門大下馬通西城大手 御入輦

右之通御改相成の間申達の事

今般 御東幸被爲在の處孰れも旅中の儀に付格別の譯を以て二等官より五等官迄烏帽子直垂被下置の旨御沙汰の事

東儀石見介 東儀將曹 今般 御東幸樂御用可相勤旨御沙汰の事  
來る八日より左之通御規則被改の 親王二重橋外 一等官中仕切御門外 二等官三等官公卿諸侯大手橋外 四等官以下下馬札 五等官以下下馬札

一等官御表門御門外 二等官三等官公卿諸侯坂下御門外四等及以下下馬札  
右之通場所にて可爲下馬下乗の事

常州水戸並ニ土浦藩ヨリ届書

北越へ脱走罷在の奸徒共其他諸藩脱賊等先般會領高田表ニ屯集致し付御親  
兵並ニ弊藩人數にて及進撃の趣の處件の奸賊共同所敗走の未去る廿六日太田原  
銚九領分野州太田原城へ來襲同家並ニ藝州等の人數にて致防戦の得共折柄無勢  
にて難支終ふ及落城の哉ニ相聞奸徒共ハ夫より分隊の相成翌廿七日朝一手ハ弊  
領馬計村一手ハ左貫村兩道より押來の付夫々人數練出シ急速進撃の手配及  
ハ旨國許より申越ハ尤も右兩手の賊兵都合五百人計にハ相見えハ共何分窮鼠  
必死不容易形勢付此段不取敢申上ハ以上  
土浦藩届書 去る朔日出相模守よりの先申届 昨日申上ハ通り水戸表へ彼藩  
脱走の徒多人數襲來追々不容易形勢立至リ既ハ當朔日にハ城下まで押入ハ旨  
ハて援兵の儀度々頼越ハ處在所表も爰元へ出兵故人少殊ハ自然領内も不穩應援  
仕ハ程の兵隊無之ハへ共隣單の儀ハ付不取敢隊長奥田圖書附屬の兵隊八十人餘  
を卒ハ一昨二日夜水戸表爲應援出張爲仕ハ在所表の儀ハ先別條無之嚴重守衛罷

在ハ旨今曉早追を以て注進申越ハ猶報知次第可申上ハへ共此段ハ届申上ハ以上  
諸侯扈從ヲ減少スヘキノ達

諸侯供廻り多分召連れ尊大華麗ケ間敷儀ハ昇平の久き自然と驕侈ハ赴きハ弊風  
ハ付先達て古今の形勢ハ参考の上簡易を主とし供連定則被仰出ハ處頃日洛中の  
往來ハ供人多分召連間々挾箱等爲持或ハ先供の者嚙道ハ齊キ舉動有之哉ハ相聞  
御趣意を不辨次第ハ相當リ以の外ハ自今右様の儀無之係定則通り屹度相心得  
ハ様御沙汰ハ事

但供廻りの多分ハ依リ貴賤を相判ハ儀ハ無之貴ハ自ら貴ク賤ハ自ら賤シキ道  
理故道路の往來各自ハ其分を辨へ互ハ相譲リ通行妨げ等無之勿論ハハへ共諸  
列侯ハも右本文之通被仰出ハ上ハ庶民未々ハ至る迄此旨篤と領會致シ貴人と  
行違ハ節禮義を盡シ不敬等決て無之様可相心得事

右之通被仰出ハ間府藩縣ハ於て其支配所へ未々の者ハ至る迄不洩様兼て可申諭  
置ハ事

○十一月

五日 薩州藩届書並ニ指令書



弊藩兵隊東北遊擊軍將殿へ附屬羽州へ出張の筈にて去る七月十日大坂より乗船御隨從仕の所洋中度々不慮乗艦破損等の儀有之長州馬關より帆前船へ乗替被仰付尤も本船へ引船渡海の筈にて同十四日同港出帆の處逆風烈濤にて彼是へ繫船終り奉別本船先渡り相成其後兎角風便不宜彼是季節も相移り中途進退相窮不得去る九月三日雲州三保ヶ關より揚陸行軍の處間道殊り峻難の道にて漸く同月十八日越前敦賀へ着仕の處軍期殆ど相後れり形状にハ得共何分軍將殿隔地滞陣の儀に付同廿日同所發足陸地行軍仕の處再三使節を以て御沙汰の趣も被爲在彌以て勉勵晝夜兼行の心得にて差急に共如何にも遠路剩へ越後市振驛にて風濤の爲に通行難仕不得止滯留仕の仕合等實に天災不幸とハ乍申如何にも進軍遷延且兵隊の情實等軍將殿へ爲申上二上良大夫急行差立兵隊の儀ハ漸く十月十日越後新潟着の處別紙之通使節を以て達有之尙又良大夫へ重て厚く御沙汰の趣も有之の間直り同所より引揚申の尤も兼て爲親衛分隊三十人ハ其儘隨從被仰付東京へ供仕居り別紙達寫相添此段申上以上

神尾 尙 太郎

十一月五日

安藝少將公用人 熊 谷 兵 衛

別紙

藝州兵隊へ東北遊擊軍將隨從被仰付置の處奥羽越平定に付解陣被仰出の然る處其隊是迄山河跋涉勤勞不容易の段氣の毒被思召定て遺憾存の儀と察入に共右の仕合に付勝手歸國可致事

十月

御朱印

物ヲ賜テ諸藩士兵卒等ノ軍功ヲ賞ス

薩州兵隊 久々遠路跋涉攻撃奏功既り東京に於て云々

但來春云々

福知山兵隊 征討出張遠路跋涉其勞不少此節東京 御駐輦中の儀に付不取敢被爲慰軍勞酒肴被下り事

薩州兵隊長州兵隊明石兵隊各通 征討出張遠路跋涉日夜攻撃至る處功を奏す其勞不少以下同斷

藝州兵隊 征討出張遠路跋涉日夜攻撃至る處功を奏す以下同斷  
小笠原豊千代丸兵隊 右同文

藝州兵隊 征討出張遠路跋涉其勞不少此節東京 御駐輦中の儀お付不取敢爲  
被慰軍勞酒肴被下り事

物ヲ賜テ諸藩士兵卒等ノ創傷ヲ慰勞ス

柳川藩 蜂谷一學 利光作之進 坂本永記 寒田新助 向坂太仲 丹 重人

征討出張遠路跋涉日夜攻撃遂ニ被創傷今般凱至之段別て艱勞の事お此節東京

御駐輦中の義お付不取敢被爲慰病情此品被下り猶精々病養可相加之事

藝州藩 高橋源六 多賀外藏 近藤權六 由川勇次郎 瀧口辰吉 橋本春太郎

右同文

同月八日御沙汰書寫

長州藩 町田楳之助 山田富次郎 勝田四方藏

井上百合祐 市川三右衛門 伊藤幾之允 繁澤 敢士

中所敏之助 國弘 節三 小方 兵馬 山本彌太郎

武安留三郎 平佐 彦七 工藤源次郎 兒玉幾之進

東條岩之允 豊田半三郎 三浦 與三 繁澤 行藏

市川 千藏 陶山直次郎 安井熊之助 積山乙五郎

馬木 木工 澁谷 義介 山縣鹿之介 世良五左衛門

赤木 甲熊 山縣與一郎 末國次郎左衛門 平岡甲太郎

波多野競介 糸永彌次郎 福原 伊助 兒玉與四郎

弘武 三郎 梶山 元輔 南方權五郎 吉原 貫吾

渡邊 太郎 糟谷 兵馬 飯田宇一郎 横山新之允

征討出張遠路跋涉日夜攻撃遂ニ被創傷以下同前

○十二月

松平容保伊達慶邦等ヲ非常ノ寛典ニ處スヘキノ詔書

賞罰ハ天下ノ大典 朕一人ノ私スベキニ非ズ宜ク天下ノ衆議ヲ集メ至正公平毫

釐モ誤リ無キニ決スベシ今松平容保ヲ始メ伊達慶邦等ノ如キ百官將士ヲシテ議

セシムルニ各小異同アリト雖其罪均シク逆科ニアリ宜ク嚴刑ニ處スベシ就中容

保ノ罪天人共ニ怒ル所死尙餘罪アリト奏ス 朕熟ラ之ヲ按ルニ政教世ニ治ク名

義人心ニ明ナレバ固ヨリ亂臣賊子無ルベシ今ヤ 朕不徳ニシテ教化ノ道未タ立

ス加之七百年來紀綱不振征亂弊習ノ由テ來ル所久シ抑容保ノ如キハ門閥ニ長シ

人爵ヲ假有スル者今日逆謀彼一人ノ爲ス所ニ非ズ必首謀ノ臣アリ 朕因テ斷シ

テ曰其實ヲ推シテ其名ヲ恕シ其情ヲ憐シテ其法ヲ假シ容保ノ死一等ヲ宥メ首謀ノ者ヲ誅シ以テ非常ノ寛典ニ處セン 朕亦將ニ自今親ヲ勵精圖治教化ヲ國內ニ布キ德威ヲ海外ニ輝サンコト欲ス汝百官將士其レ之ヲ體セヨ

○今歲拾遺

諸家感慨詩歌

大樹公上野の岡ニ寺籠りたまふよしうけたまはりけれの  
あられ君かきこもります此うへの世の中いりみなりり行らむ

題しらす

大神御牧

けかれつる謠名をいすくけ何事も忘のふり岡のはなのゑら雪

述懷

作者不詳或云松平容保作

自古英雄多數奇、胡爲大樹棄連枝、斷腸三顧許身日、揮淚南柯入夢時、萬死報恩志未遂、半途墜業恨何涯、暗知氣運推移去、月黑橋頭啼子規、  
船のこと義邦の心をなやますとさきて 慶喜  
たよひて沖よこかるく船よりもむねの烟をおもひやらるく

美作守のもとにおくる

安房守義邦

さみたれよゑはしつ濁れすみた川すむを常なる世ふらあなれい

いかなるをりより

讀人不知

おのり身の上の思ひをかたつふり角のあらそひあられいつまで

偶作

水哉逸史

要息干戈解内憂、其如外寇覲神州、桓文功業王家貴、周召風治民庶休、萬世應須全玉璽、一時莫誤缺金甌、請看角逐分爭勢、蚌鷁並遭漁父收、

題不知

讀人不知

くみ民のなけきのこゑをひさ方の雲井お告げよやまほとくさす

會藩廣澤安任

欲因大義舉綱維、一決此心何又疑、休逐末流煩口舌、至誠自有貫天時、

失題

海舟漁人

蜻蜒不知冬、井蛙笑蟄龍、下士昧大義、何空苦心胸、寰宇今咫尺、烟波一萬里、滾々翻駭浪、倏忽姿行止、蔓衍及東洋、強弱互勃起、妖氣橫中洲、骨肉爭小節、遠圖誰所劃、蒼生被戰血、終生鷓蚌悔、不用煩饒舌、



これの嘉永明治年間録にはやく泰平年表といへる書れよあるみならひてわが父のあらはせる也その嘉永の五年より筆をおこしていふと明治の元年まで凡て十あまり七年の間世にありしことどもをおほりたもらさきはふらさきかき記されたるをひそり家おをさめおくれしもの也そもくわが父のむさしの國埜玉郡多門村お生れて氏を吉野名を眞保といひきこの書ものせんとおもひおこされしより茜さすひるのいさくりのひまおもあなたこなたたづねもどめぬは玉の夜の燈火のものと筆とりて蚊の聲のいおせきも厭の硯の海のこほれる寒夜にも火をけのすみさしそふることをさへわすれてあまたの年月いたつさましつるを今思へばいと貴とくいとむりしくなんおほゆるこの書かきめられし頃のおのれいまたいとけなきほど也畑田の家よやしなへれて衣手の常陸の國人と成て後父がいたつきをたすけてんとおもふ心の出来て校合またふでとるたすけもしたりけるをいふと明治三年此四月はうなくもみまかりましてわが亡父のかたみとて唯この書のみなるをいりせさくら木お匂のさはやといおもへどちから及ばぬわさなればおもひとゞまりてたゞうまこの末のよあつたへまほしくて

ひめおきたるほどよいつのまより公にも聞えたりけんそれ奉るべきおほせことかふふれるのかれたる木お花さきみのる心ちしてすくくも書清めてご奉りたりけるお又此年の冬父が年ころのいさはをめで給ふとてこらの金を賜りたりけりかしてさかぎりなけれバそのゆゑよとあるして隅田川なる梅若の社内に紀恩碑と題して石碑たてたりとらうあれといふと大宮の火のわざはひあわが奉りし書も焼失せぬれば公よもいたくをむ給ひて草稿をたよ奉れど猶おほせことおよりて皆なりらふ奉りぬさればわが家にいたくかき亂したる草稿のみなればいと心もとなくてそをよく考へたゞし書正しおりまほしく年月わするゝひまもあらねどさはるそのみ有てえもはたさゞりけるほどあわが父の友細野の長雄大人のいと心ある人にてそれ一部書清めて家お傳へんとておのれおはうられけるまゝおいとよろこばしくて更お校正しつゝ人おあどらへてかくの寫さしめ終ぬかれこの書れ後よいさく小川のいさくりそれよをかしおるすあなん

明治十一年八月

かまたの眞幹

明治十五年十一月廿五日御届著者 故吉野真保  
同 十六年七月一日出版 出版人 甫喜山景雄  
京橋區西紺屋町九番地

○追加

紀恩之碑

處士吉野真保既沒之明年 朝廷徵遺書於家其子真幹感悚齋沐告於廟整頓其書上之爲書十有八卷上下十七年其事可概見題曰嘉永明治年間錄其十一月有命曰汝父真保畢生拮据致力著作足以嘉獎矣於是賜金七十五圓真幹拜命泣曰 天恩優渥榮及枯骨是不可不紀以傳乃樹石表曰紀恩之碑間銘於余余嘆曰夫業不患於不成而患於不傳自古抱才之士不幸不得志於當世往往望有托以傳蓋嘉永以降海內紛擾無復寧歲及一今上踐祚百度丕新政體一變往日之事將何就而徵焉苟無紀載以傳之則百年之後孰能知忠邪淑慝之蹟與夫盛德大業之所繇乎哉而世之文人自命者徒弄翰墨其有著作以供國家異日之用類處士之所爲者鮮矣是處士所以特取寵榮而所謂有託以傳者處士豈非其人耶方今 朝廷急於材一長必取一能必舉顧處士未及試而亡何其不幸也然處士非生於危疑紛擾之際發憤著書則其能有今日之榮未可知處士其可無以憾矣處士武藏埼玉郡人少有



